
粟津湖底遺跡から見た縄文時代の生業と環境

Subsistence and Environment of the Awazu Shell Midden in the Jomon Period

伊庭 功

【要 旨】 滋賀県大津市域の琵琶湖底に所在する粟津湖底遺跡は、縄文時代早期初頭から中期前葉を中心とする時期に営まれ、琵琶湖においては数少ない大規模な貝塚を伴う遺跡である。1990～1991年に航路浚渫工事に伴って実施された湖底の発掘調査では、中期前葉の第3貝塚が新たに発見された。ここには貝殻や魚類・哺乳類の骨片とともに、イチイガシ・トチノキ・ヒシの殻が良好な状態で保存されていて、当時の動物質食料・植物質食料の両方を同時に明らかにした。これらをもとに、種類ごとの出土量を栄養価に換算して食料として比較を試みたところ、堅果類、特にトチノキが大きな比率を占めていることがわかり、従来から行われてきた推定を具体的に証明することができた。また、同じ調査区で早期初頭の地層からクリの殻の集積層も検出され、中期前葉とは異なる種類の堅果類が利用されていたことがわかった。この相違は早期初頭と中期前葉の気候および植生の相違によるものと推定される。また、第3貝塚から、日本列島において約50万年前に絶滅したと考えられてきたコイ科魚類の咽頭歯が発見され、この魚類が絶滅したのが約4,500年前以降であったことを示し、その絶滅には人の活動が大きく関わっていたことが推測された。このように、粟津湖底遺跡の調査は人の生業について具体的な事実を明らかにしたばかりでなく、それと環境変化との関わりをうかがわせる資料も提供した。

1. はじめに

近江盆地の中央に位置して滋賀県のほぼ全域を集水域とする琵琶湖は、その南端から瀬田川へ排水し、宇治川・淀川を経て大阪湾に注いでいる。粟津湖底遺跡はこの瀬田川への排出口付近の水面下約2～3mの湖底に所在しており、琵琶湖沿岸では数少ない縄文貝塚のひとつとして知られてきた。琵琶湖開発事業の一環である南湖粟津航路浚渫工事に先だって1990～91年に実施した本遺跡の発掘調査では、縄文時代の生業についていくつかの重要な資料がもたらされた⁽¹⁾。

南湖粟津航路の路線は、予備的に実施した潜水試掘調査の結果から、中心部の第1・第2貝塚を避けてその東側に計画された。その航路の浚渫範囲のうち、土器が散布することの確認された2ヶ所について発掘調査を実施した。発掘調査は調査区の周囲を鋼矢板で二重に囲い、その間に土砂を詰め漏水を防いだうえで湖水を排水して行った。2ヶ所の調査区のうち、北側の調査区から縄文時代早期初頭（約9,300年前）の植物遺体層と、縄文時代中期前葉（約4,500年前）の貝塚（第3貝塚）を発見した。

早期初頭の植物遺体層は当時の自然流路の南岸に堆積していて、クリの果皮で構成されている。中期前葉の第3貝塚は、主としてセタジミからなる貝層と、イチイガシ・トチノキ・ヒシ属の3種類の果皮・種皮からなる植物遺体層、および砂層で構成されていた。特に両時期の植物遺体は水中で保存されていたためほとんど腐蝕することがなく、ところによって厚い層をなして遺存していた。これらの植物遺体と動物遺体は当時食料とされたものの残滓であると考えられる。しかも早期